附属間連携研究「環境」

伊集院　理 子（お茶の水女子大学附属幼稚園）

研究の課題

「環境教育」は、今日的な課題でもあり、幼児児童生徒の社会性や豊かな人間性を育むためには、成長段階に応じて、自然体験活動を行うことは極めて重要視されてきており、文部科学省も各学校における自然体験活動を支援している。

私たち附属学校園は自然に恵まれた大学キャンパス内に存在している。各附属で、これまでもキャンパスの自然環境を幼児児童生徒の教育に生かしていく実践が積み重ねられてきているが、充分生かしきれていないことも多く、又互いにどのような実践が展開されているかを交流する機会もこれまで充分に持てずにきた。

そこで、第一段階として、実際にどのような実践が行われているのか、その中で幼児児童生徒がどのような自然に出会い、どのような学びをしているのか、キャンパスの自然を生かした実践を報告しあい､各附属間で共通理解していくことを目的として研究をすすめてきた。

研究の実際

毎月定例の研究会を開催し、紙面上の報告を聞き合うばかりではなく、実際にキャンパスに出かけて自然を身近に観たり､授業の中で子どもたちが経験していることを実体験したり、キャンパスの自然に対する教員サイドの見識を広げていくことを第一に目指してきた。

毎月の研究会で行ってきた主な内容を以下にまとめる。

４月２２日（火）　各附属の近況報告

ナーサリー：キャンパスに散歩に出かけ、出会った自然、物などを写真に収め、本に仕立て、いつでも好きな時に子どもが見ることができるようにしている。

幼稚園：今年度「『環境』に対する豊な感受性を育む」というテーマで、この１年園内研究にも取り組んでいく。園内の自然環境と子どもとの関わりの事例をもとに実証的に探っていくことを目指す。

小学校：「春見つけ」「秋見つけ」など、各学年で大学構内に出かける機会をたくさん持っている。「しぜん」の授業では、直接体験を重視している。

５月２０日（火）　各附属園で作ってきたキャンパスの自然にまつわる具体物の持ち寄り

資料例：ナーサリー　写真集／幼稚園の４月～５月にかけての活動記録／昭和４９年度と平成５年の大学構内図「大学キャンパスの自然」／小学生の植物スケッチをキャンパス地図に貼り付けたマップ／中学生のキャンパス内での活動の姿（ＤＶＤ）など。

６月１７日（火）　キャンパスの自然めぐり

大学生活環境教育研究センターの冨永典子教授に参加してもらい、幼稚園園庭の自然（きのこ、大銀杏、もみじ、びわなど）、大学構内の自然（椎、ニッケイ、班入りあじさい、イヌビワ、イイギリ、オリーブ、ユリの木、クルミの木など）を解説つきで散策した。

７月１５日（火）　小学校授業実践の報告

７月２日に実践された「動物に食べられる植物－生き物と養分－」の授業内容・子どもたちの様子について小学校増田教諭より報告。土壌生物に目を向けさせ、自然界には様々な生物が存在し、それらが複雑につながり合い、関わり合って生きているということに気づかせることを目的とし、キャンパス内に出かけ、自分の手で土をいじり、土の中から、自分の目で分解者を発見することを重視した実践。「『環境』を考えるときに「分解者」の存在がとても大事である」ことが共通理解された。

＊幼稚園で実施されていた「むしはくぶつかん」（昨年に引き続き２年目の実践）の展示を視察。

９月１６日（火）　海外での調査報告

小学校の和田教諭がこの夏に訪問したインドネシアの自然の報告～アルソミトラマクロカルパの種のこと～を受けた。アルソミトラマクロカルパとは、４０メートルくらいの木に寄生する蔓植物。ボール状の大きな実の中に５００個くらいの種子を実らせ、その種子が乾燥すると一枚ずつ飛散する。この種子の形状がグライダーの形に結びついたとのこと。グライダー状の種子が飛行する場面を奇跡的に撮影した貴重な映像を観る。

１０月２８日（火）　粘菌探し・きのこのスケッチ体験

小学校田中教諭より、小学校５年生がキャンパスで採集して作った粘菌の標本を観察しながら、粘菌の実際の姿について報告を受け、園庭内の粘菌探しを試みた。田中教諭の関心分野でもあるキノコについても報告を受け、キャンパス内で採集されたきのこのスケッチを体験。参加者一同、きのこを熟視して、力作を完成させた。

１１月２５日（火）　中学理科の学習とキャンパスの活用（顕微鏡でキャンパスの土を観る）

中学校薗部教諭より、「中学理科の学習とキャンパスの活用」の資料をもとにキャ

ンパス活用の実際について報告を受けた。中学３年生の授業「土壌動物の存在」の中でキャンパスの土中の微生物を顕微鏡で観ることが実践されており、それを実体験した。

１２月２６日（火）　小中ＯＷＮの授業内容体験

「起立、礼」の挨拶から始まり、参加者一同生徒になった気分で、小学校田中教諭の小中ＯＷＮの授業内容「アンモナイト磨き」を体験した。アンモナイトが生息していた時代（主として中生代）に思いを馳せながら、自分が選んだアンモナイトがどのような模様なのか、模様が浮かび上がるのを心待ちに、黙々と削り続けた。

１月２０日（火）　今年度の研究のまとめについて

センター年報、研究集録に向けての打ち合わせ。

２月２４日（火）　研究集録の原稿の読み合わせ

原稿を持ち寄り読み合わせ、今年度の研究を振りかえり、次年度の課題について話しあった。

今年度の研究の成果と今後の課題

月１回、ナーサリー、幼稚園、小学校、中学校の教員が同じ土俵にたって、実践を報告し合ったり、授業内容を実体験したり、キャンパス内に繰り出したりし、机上の空論ではなく、実体験を通して共通理解を図ろうとしてきた。「環境」「自然」ということを身近な問題として捉え、そこに関わる子どもたちを育てていくためには、実体験、直接体験を抜きにしては考えられない。子どもたちに実体験、直接体験を求めるのであれば、まず、教員自らいろいろな問題に興味を広げ、積極的に体験していくことが求められているのだと考える。

１年目の研究では、テーマを絞りきることはせず、その都度変遷していったが、それぞれの現場で実践されていることの実体験を通して、キャンパスの自然を身近に感じられたことは、とても大きな事であった。

２年目は、ナーサリーの幼い時期から自然との関わりを積み重ねていくことで、何が子ども達の中に育っていくのかを継続的に捉え、各校園の実践のつながりを明らかにしていきたい。また、お茶大のキャンパスを見直して、幼児・児童・生徒がキャンパスをより良いものにしていくための実働者として参加する方向性を探っていくなど、さらにキャンパスの自然と幼児・児童・生徒の関わりを深めていくことを次年度の課題としていきたい。